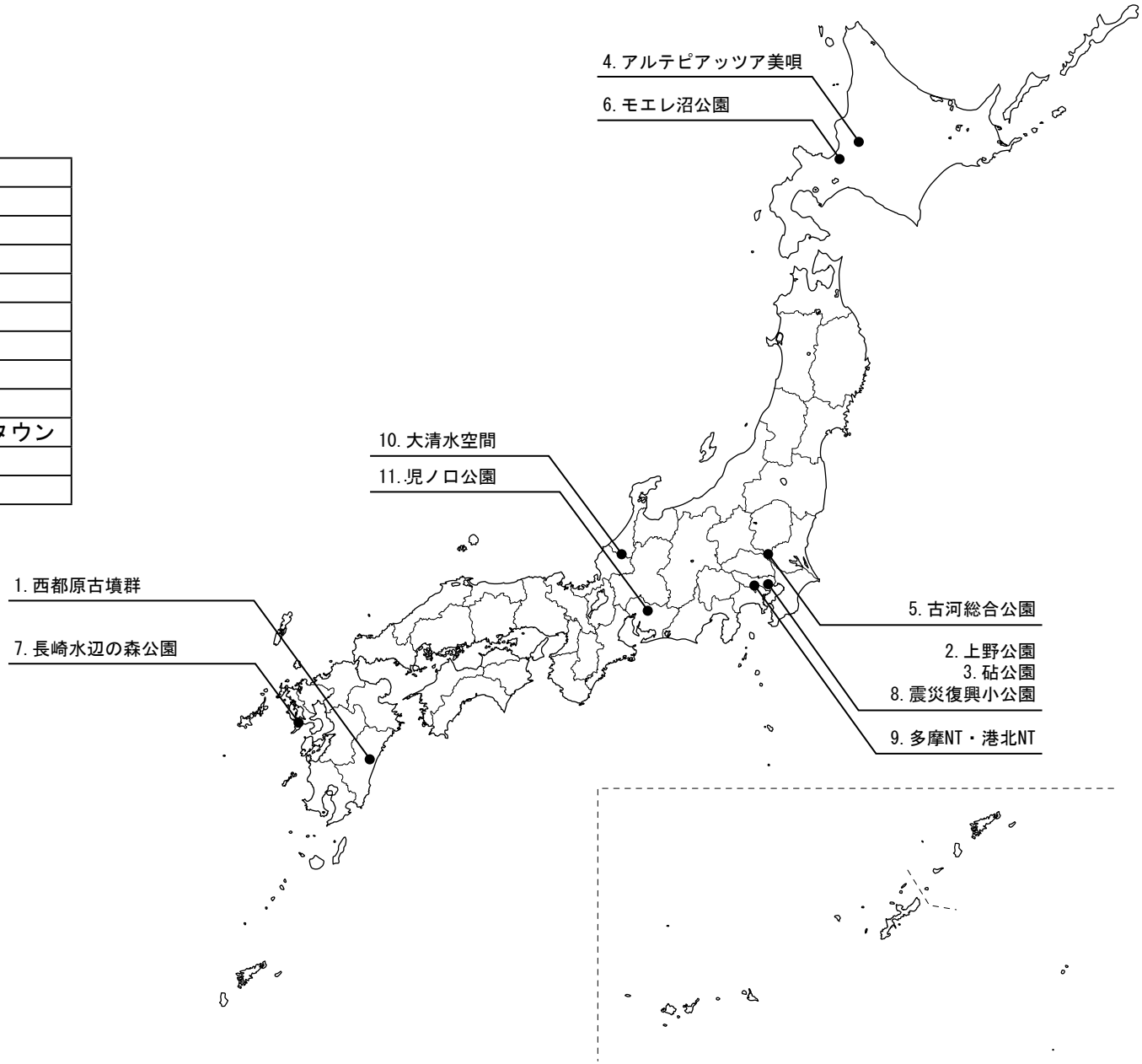
規範事例集【公園編】

目　次

事例位置図【公園編】……001
１．西都原古墳群
／史跡である古墳群と自然・田園が渾然一体となった公園……002
２．上野公園
／江戸時代の名所を踏襲して文化施設を集約した近代的な都市公園……006
３．砧公園／グリーンベルト構想を起源に持つ自然地形を活かした緑地……010
４．アルテピアッツァ美唄／廃校を活用して創造された芸術空間……014
５．古河総合公園
／原風景の再生と新たな名所づくりを目指した市民の交流空間……018
６．モエレ沼公園
／広大な敷地を活かして大胆に造形した大地のアート……022
７．長崎水辺の森公園
／まちと港のネットワークを強化する水辺の空間……026
８．震災復興小公園
／小学校と公園を組み合わせて配置した防災コミュニティ空間……030
９．多摩ニュータウン・港北ニュータウン
／街づくりのシステムとして計画・実践されたオープンスペース……032
10．大清水空間
／水の小空間のネットワークによる旧城下町の再生……036
11．児ノ口公園／川の再生を基軸とする都市公園の新しい姿……040
参考文献リスト……044
図版出典リスト……045

事例位置図【公園編】

No.	事例対象
1	西都原古墳群
2	上野公園
3	砧公園
4	アルテピアッツァ美唄
5	古河総合公園
6	モエレ沼公園
7	長崎水辺の森公園
8	震災復興小公園
9	多摩ニュータウン・港北ニュータウン
10	大清水空間
11	児ノ口公園



西都原古墳群（さいとばる）／史跡である古墳群と自然・田園が渾然一体となった公園

【諸元】

所在地：宮崎県西都市
面　積：68.5ha（計画面積）
施　設：古代生活体験館、このはな館、西都原考古博物館　他
事業主体：宮崎県
管　理：宮崎県

【概要】

「風土記の丘」構想は、昭和40年に現在の文化庁文化財保護部が遺跡の保存と活用を図るために創設した施策である。その目的は、各地方における伝統ある歴史的風土的特性をあらわす古墳、城址などの遺跡等が多く存在する地域の広域保存と環境整備を図り、この地域に地方文化の所産としての歴史資料、考古資料、民族資料を収蔵、展示するための資料館の設置等を行い、これらの遺跡及び資料等の一体的な保存及び普及活動を図ることである。

これは、従来の個別の指定史跡の公有化や整備にとどまらず、遺跡等を中心とした面積16万5千㎡以上の用地を公有化等により確保することを国庫補助の適用条件とするなどして、遺跡等の文化財の集中的に分布する地域を対象として周辺の自然環境とともに総合的に保存・活用を図ることを目指すものである。

この構想は、昭和41年度から予算化され、その第一号として、西都原古墳群を中心とする西都原風土記の丘史跡公園は、昭和41年から44年にかけて整備された。

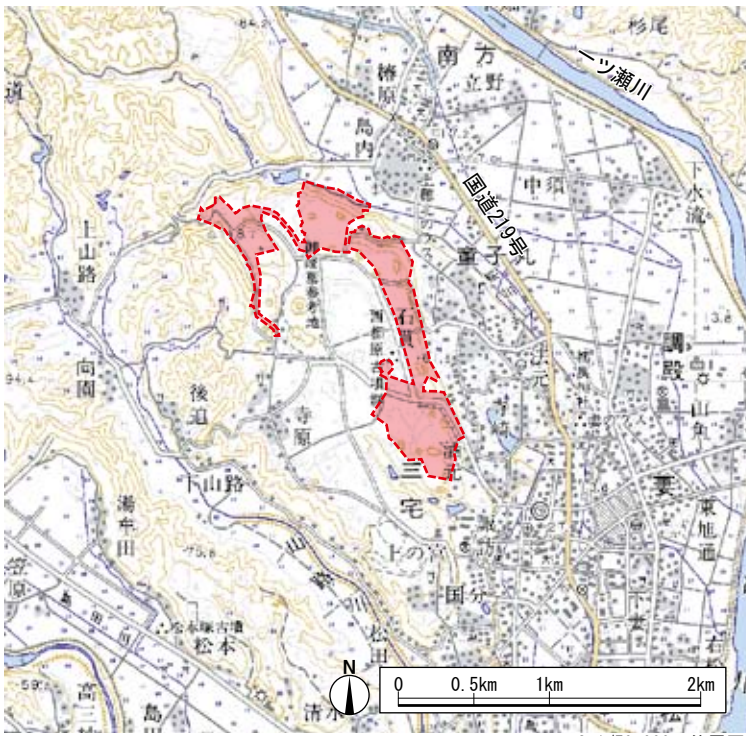
【沿革】

4～7世紀（推定）	300有余ものさまざまな形をした古墳を築造
大正元（1912）年	本格的な古墳の発掘調査開始
昭和19（1934）年	国の史跡に指定
昭和27（1952）年	国の特別史跡に指定
昭和41（1966）年～	風土記の丘第1号として、古墳と自然が調和した歴史的景観を維持保存する整備を実施
昭和42（1967）年	「西都原風土記の丘」史跡公園が開設
昭和43（1968）年	西都原資料館が開館
平成17（1995）年～	古墳の保存修復、見学施設建設等再整備
平成11（1999）年～	自治省のリーディング・プロジェクト事業により、西都原考古博物館ほか都市公園としての機能拡充
平成16（2004）年	老朽化した西都原資料館に代わり、西都原考古博物館がオープン

【景観保全のためのしくみ】

文化庁
：特別史跡（現状変更や保存に影響が出る開発などの制限）
宮崎県
：県立自然公園（周辺農地等における開発規制）
：農業振興地域（農地以外の土地利用を制限）
宮城県、西都市、地域住民
：西都原協議会（大規模な工作物等を抑制）

鬼の窟古墳



S=1/50,000　位置図

【自然・田園景観との一体性】

古墳の周辺には農地（民有地）が広がり、古くから日常的な生活の中に古墳群が溶け込むように存在してきたことが見て取れる。現在でも農地と古墳の間には何の仕切りもなく、自然、田園と一体となった古墳群として良好な景観を形成している。

樹木も、古墳群の特徴をわかりやすく、また効果的に見ることができるような位置を選んで配置されている。公園としての整備も、特に大きな改変を行うことなく、古墳を縫うように園路が配置され、休憩施設も簡素なものを点在させることにより、古墳群が、その場所に違和感なく、自然に存在しているようなたたずまいとなっている。

第三古墳群上空より

古墳群と隣接する農地

古墳を縫うような園路とさりげなく配置された休憩施設

【景観維持のための配慮】

昭和41年から行われた整備事業では、古墳の復原修理および古墳周囲の環境整備等を行うとともに、歴史的に貴重な資料を保存・公開する施設として、西都原資料館が建設された。この資料館の建設に際しては、西都原の優れた歴史的景観と自然景観を損ねないように半地下式となっている。

整備地域以外の農地等においても、県立自然公園の指定による開発規制や、さらには農地に係るビニールハウスの設置の規制等、市民の努力と協力により開放的な景観を維持している。

当地域は古墳群だけでなく、その周囲の農地等を含めた一連の開放的な空間の中で、人工構造物の抑制および古墳景観と自然景観・田園景観の一体化によって、優れた風景が形成されており、それが個性と魅力になっている。

S=1/10,000　特別史跡公園　西都原古墳群管理区域平面図

古墳周辺の花畑　古墳周辺にはナノハナやコスモスが植えられ、季節には多くの観光客が訪れる。

西都原考古博物館からの眺め　第３古墳群が見える。樹林、農地、古墳によって構成された景観となっており、電柱も見られない。公園周辺は農業振興地域に指定されており、また、地域の紳士協定によって大規模工作物も設置されていない。

西都原考古博物館　昭和 43 年に建設された西都原資料館は自然景観を損なわないように半地下式とされた。この資料館は老朽化により取り壊され、新たな施設として平成 16 年に建設された西都原考古博物館は、公園内でひときわ突出した存在となっていることが残念である。

上野公園／江戸時代の名所を踏襲して文化施設を集約した近代的な都市公園

【諸元】

所在地：台東区上野公園
面　積：53.4ha
施　設：東京都立恩賜上野動物園、不忍池、国立科学博物館、東京都美術館、上野の森美術館、上野東照宮、台東区下町風俗資料館、水上音楽堂　等々
事業主体：内務省博物局
東京府
管　理：東京都建設局
公園緑地部

【概要】

江戸幕府に信任の厚かった天海僧正の進言により、江戸城の鬼門封じとして建立された東叡山寛永寺の所領であったこの一体は「上野の山」と称され、サクラやハスの名所として知られる江戸庶民でにぎわう景勝の地であった。

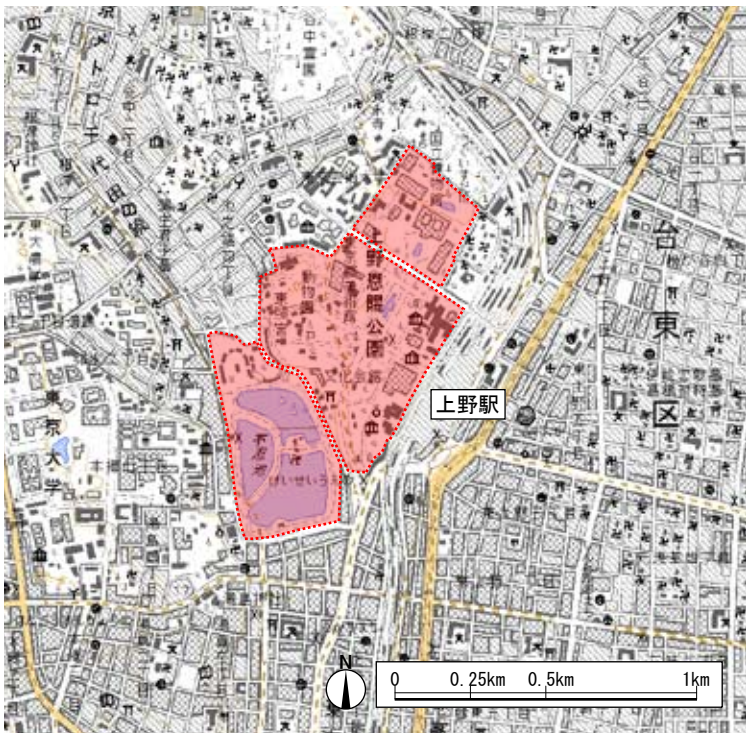
この江戸から続く景勝地が公園化されたのは、明治６年「太政官布達」により、寛永寺境内地を公園として指定したことに始まる。幕末の彰義隊の戦争により荒れ野と化した上野の山は、病院・大学用地として準備が進められていたが、新政府の近代化政策の一環として、公園として整備されることとなった。

明治期の上野公園は「第１回　内国勧業博覧会」を期に、数多くの博覧会の開催地となり、このため、近代的施設が次々に建設され、これらは博物館や美術館に流用された。また、当地は文部省用地を兼ねていたことから、東京美術学校・音楽学校が相次いで開校し、現代にも続く「文化の森」として発展を遂げている。

【沿革】

寛永　2(1625) 年	江戸幕府の要人、天海僧正の進言により東叡山寛永寺を建立
寛永 13(1636) 年	このころから寛永寺でさくらの花見が行われる
元禄 12(1699) 年	茶屋の設置が許可される
慶応　4(1868) 年	彰義隊の戦争により、上野・下谷などが焼ける
明治　6(1873) 年	太政官布達により寛永寺境内を公園に指定
明治　9(1876) 年	公園建設完成・開園 茶屋が撤去され、精養軒などが開業
明治 10(1877) 年	第１回内国勧業博覧会を開催
明治 15(1882) 年	動物園と国立博物館を設置
明治 22(1889) 年	東京美術学校開校
明治 22(1890) 年	東京音楽学校開校
大正 13(1924) 年	東京市に払い下げられ、上野恩賜公園という名称となる
昭和 28(1953) 年	水上音楽堂竣工、竹の台（大噴水）周辺整備
昭和 55(1980) 年	下町風俗資料館が開館
平成　2(1990) 年	不忍池浄化対策、周辺植栽整備

名所江戸百景　上野清水堂不忍池
（歌川広重画）



S=1/25,000　位置図

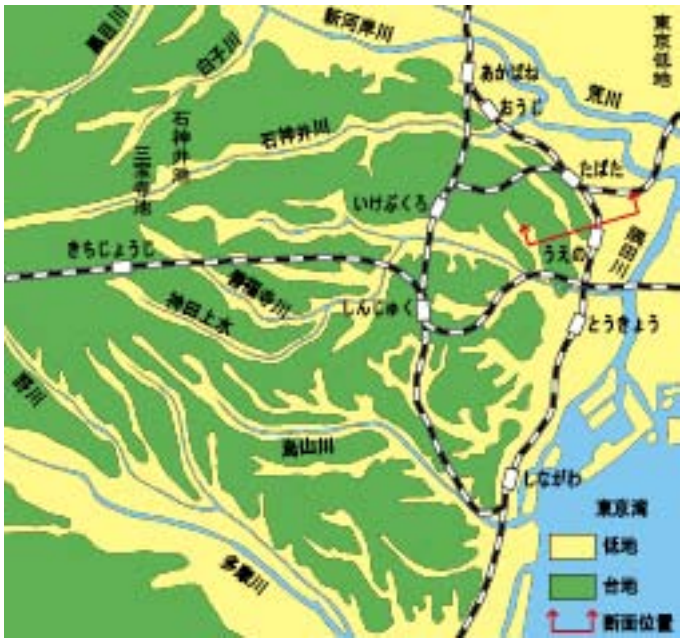
【上野公園周辺の地形】

上野公園とその周辺を含むいわゆる「上野の山」は、地形学上では山の手台と呼ばれる台地と東京低地の境にあたり、「上野台」と呼ばれる台地となっている。

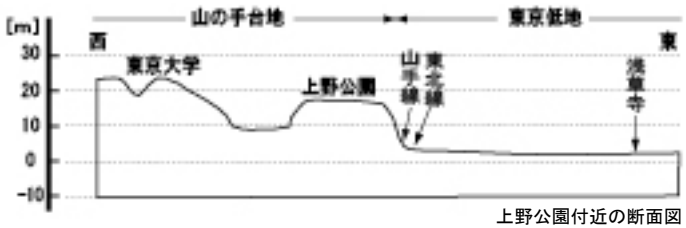
この場所にはいくつもの時代に渡る遺跡が存在し、そしてそれは、上野台の地質学的な成立過程と深い関わりを持っている。

縄文時代の不忍池は海であり、狩猟採集生活にうってつけなこの入江に人々が集落を構えていた。地形の隆起により海退が進み、海底だった低地が地表に姿を現したことにより、地盤が堅く眺望の利くこの高台は、時の権力者の占有地として受け継がれていった。

このような過程を経て形成された上野台を取り巻く台地・崖線・水辺という空間構造と景観こそが、後に当地が「名所」として歴史を刻んでいくことを決定づける要因となったのである。



上野公園付近の概略地形



上野公園付近の断面図

江戸不忍弁天ヨリ東叡山ヲ見ル図　近世に描かれた絵図にもみられるように、台地と崖地、水辺で空間が構成されている。

現在の上野公園　手前のハスに覆われた不忍池から台地・崖地方向を望む。

【名所としての上野の山】

いわゆる上野のお山と不忍池周辺が、現在まで引き継がれる「名所」として成立したのは、江戸時代のことである。江戸城の鬼門封じとして、東叡山寛永寺が創建されたことより、多くの参詣客が訪れ、当地はにぎわいを見せ始める。

上野の山にサクラが植えられたのは、寛永寺の建立を進言した天海僧正や、当時の幕府の文政面での実力者である林羅山が好んでサクラを植えたことに始まるといわれている。寛永期末には、全山がサクラで覆われるほどとなり、元禄頃になると、桜ヶ岡（現在の西郷像、清水堂のある台地）が花見の場として、一般庶民に公開されることとなった。

不忍池は、寛永寺創建に際し、比叡山麓の琵琶湖に見立てて、琵琶湖の竹生島を模して島を築き弁天堂作ったことにより、その名を馳せることとなった。その水辺の景観は、初夏のハス、夏の納涼、秋の月見など、季節により変化に富んでおり、浮世絵にも多く取り上げられた。

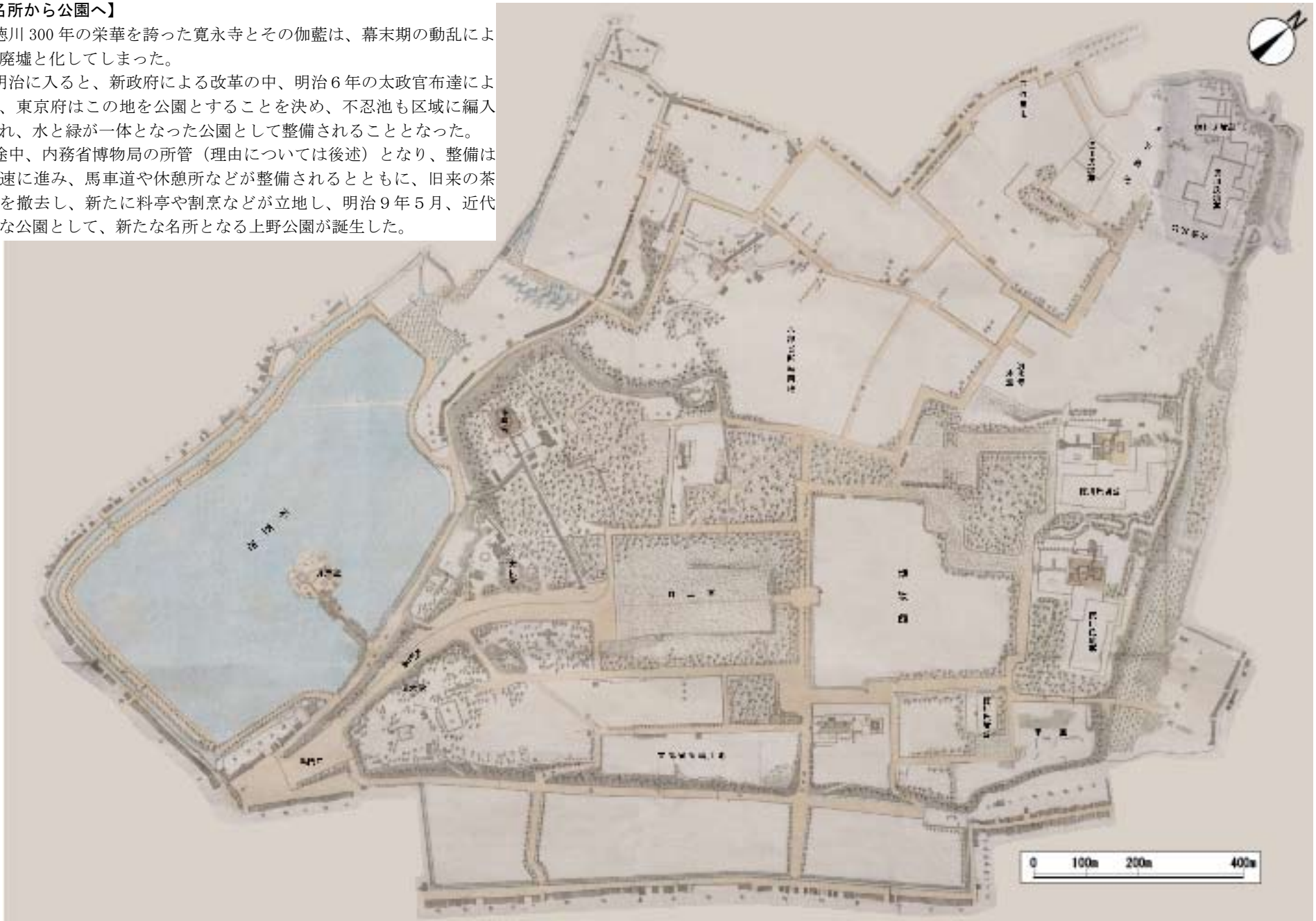
また、不忍池畔には茶屋等が立ち並び、庶民の社交の場として賑わいを見せていた。継承後としての上野のお山や不忍池と、遊興施設である茶屋等が一体となって、江戸随一の名所としての地位を確立していった。

【名所から公園へ】

徳川300年の栄華を誇った寛永寺とその伽藍は、幕末期の動乱により廃墟と化してしまった。

明治に入ると、新政府による改革の中、明治６年の太政官布達により、東京府はこの地を公園とすることを決め、不忍池も区域に編入され、水と緑が一体となった公園として整備されることとなった。

途中、内務省博物局の所管（理由については後述）となり、整備は急速に進み、馬車道や休憩所などが整備されるとともに、旧来の茶屋を撤去し、新たに料亭や割烹などが立地し、明治９年５月、近代的な公園として、新たな名所となる上野公園が誕生した。



S=1/10,000 明治初期の上野公園

【近代化と上野公園】

上野公園が内務省博物局の管轄となったのは、国策として、ここに博物館を建設し、博覧会を開催するという政治的な意図によるものであった。積極的な近代化政策を進めるにあたり、国内の産業振興・学問発展を促す施策として、博覧会開催と博物館建設を急務と考え、文部省から用地の返還を受け、寛永寺本坊跡を博物館用地とした。

上野公園の空間構造は、寛永寺のものとよく似ている。双方とも、台地と崖線と水辺という地形的な特徴をそのまま活かしていることは前述の通りであるが、寛永寺が江戸幕府による国家的色彩を持っていたのと同じく、上野公園も博物館を中心とした、明治新政府の国家的な性格を持った公園であったことが多分に影響しているためであると考えられる。

上野公園は、国家プロジェクトの中心を担う公園として、明治10年「第1回内国博覧会」の開催を皮切りに、その後、様々な国家的行事の開催場所として、また、近代化の拠点として発展を遂げていったのである。

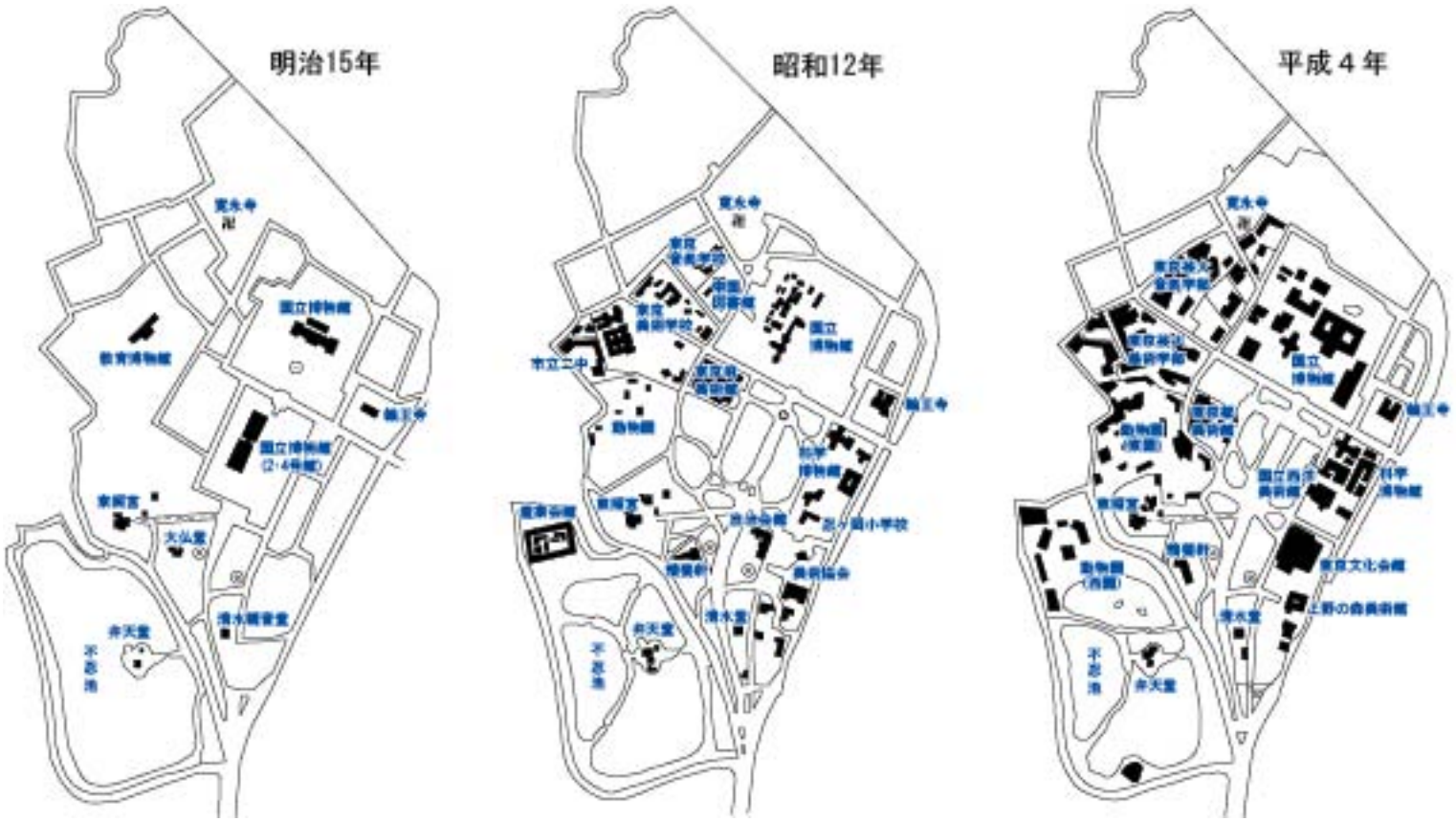
【文化の森、現代の名所】

明治14年に博物館が竣工したことに始まり、上野公園は文化・教育の発信地とされてきた。

明治期から昭和初期にかけて、博物館の付属施設としての動物園の開園、東京音楽学校および東京美術学校（現東京芸大）の開校、帝国図書館（現国会図書館上野支部）、東京府美術館（現東京都美術館）、東京科学博物館などが相次いで建設された。

戦後の荒廃した公園の復興に伴い、国立西洋美術館や東京文化会館、水上音楽堂、また近年では、下町風俗資料館などが建設され、現在も我が国を代表する文化ゾーンとなっており、旧来から続く名所としての特性と相まって、一般的な公園としてはくくりきれない、豊かな空間を形成している。

江戸時代の寛永寺の伽藍配置



上野公園の変遷

砧（きぬた）公園／グリーンベルト構想を起源に持つ自然地形を活かした緑地

【諸元】

所在地：東京都世田谷区
面　積：39.1ha
施　設：ファミリーパーク（芝生広場）、野球場兼競技場、小サッカー場、サイクリングコース、世田谷美術館、有料駐車場、バードサンクチュアリ　等
管　理：東京都

【概要】

砧公園は、紀元2600年記念事業の一環として、首都東京の周辺に計画された6箇所の大緑地の内の1つであり、戦前の「東京緑地計画」における環状緑地帯計画の一角を担うことを目的に計画された公園である。

これらの大緑地は計画当初、有事を想定した、防空緑地としての役割を担うものであり、砧公園についても、戦時中は、食料増産のための農地として利用されたり、防空壕などが彫られるなどした。

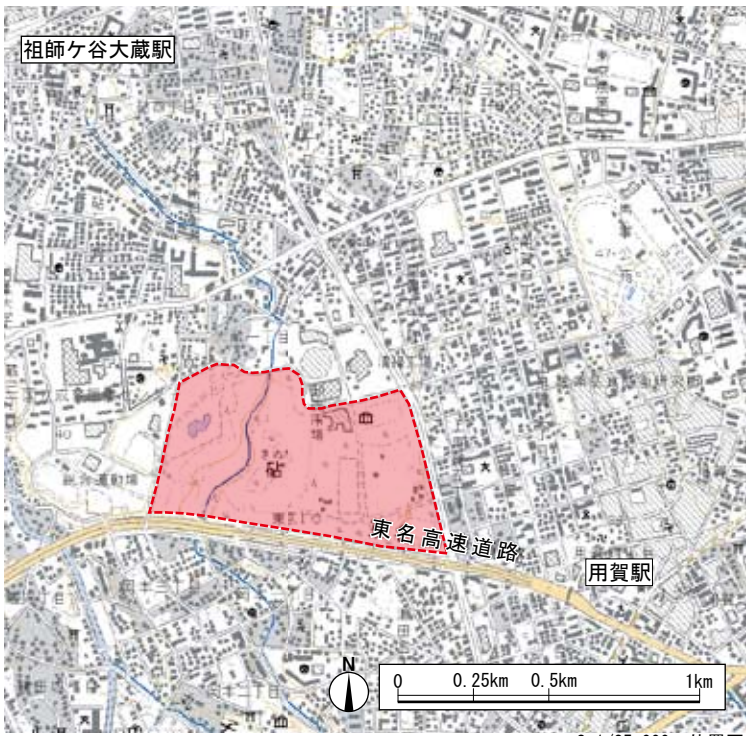
戦後は、農地解放により、その多くの土地が供出され、また、都営のゴルフ場となるなどの変遷を経て、現在は自然地形を活かした芝生広場と樹林で構成されたファミリーパークとして整備され、近隣住民の憩いの場となっている。

【沿革】

昭和15(1940)年　紀元2600年記念事業としての砧緑地の設置が東京府記念事業審議会で可決
昭和16(1941)年　用地買収終了、「勤労報国隊」により整地作業を開始
昭和18(1943)年　軍事･滑空･戦技訓練場の建設開始、一部区域（約6割）を農用地として利用
昭和21(1946)年　戦災復興用として苗圃での樹木育成の開始
昭和22(1947)年　失業対策事業として整地、草刈り等の開始
昭和23(1948)年　昭和21年に公布された「自作農創設特別措置法」により公園面積の40%以上を農地解放
昭和24(1949)年　野球場・野営場が新設
昭和30(1955)年　東京都砧ゴルフ場開設
昭和32(1957)年　砧公園開園
昭和41(1966)年　ゴルフ場を廃止し、既設公園に追加開園
昭和61(1986)年　世田谷美術館開館
平成　6(1994)
　～10(1998)年　再生整備

自然地形を活かした緩やかな勾配の芝生広場

公園を縦断する谷戸川とそれを渡る吊橋



S=1/25,000　位置図

【東京緑地計画】

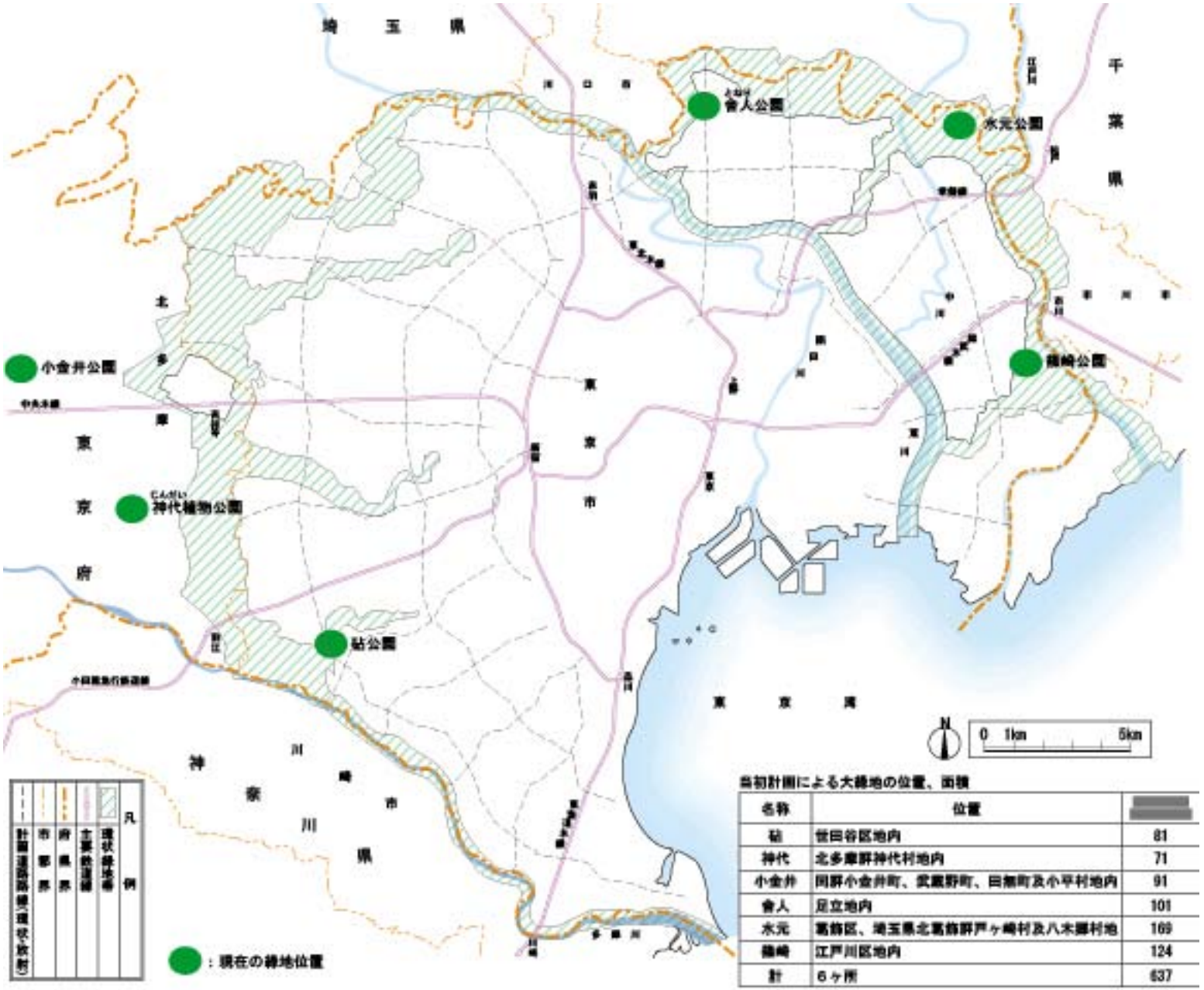
東京市では、昭和初期から人口の増加・都市の巨大化が起こりはじめたことより、都市環境が悪化し、総合的な緑地計画が必要となってきた。これを受け、昭和７年、東京緑地計画協議会が発足し、公園その他の緑地計画の体系化を図ることとなった。この中で、都市の無制限な拡大を防ぐため、東京市の外周に沿って環状の緑地帯を設置する計画が定められた。

【大緑地の配置】

昭和15年、神武天皇即位2600年の記念事業として、当時の東京府は６ヶ所の大緑地の設置を決めた。その１つが後に砧公園となる砧緑地である。

大緑地は、以下の基本方針により計画された。①東京駅を中心とした半径20km圏内の環状緑地帯内に配置。②都市計画道路路線（環状・放射）、鉄道、軌道敷を等接または近接。③緑地相互の間隔は４～8km。④面積は各20万坪以上とし、地形地物の現状に応じ出来るだけ大きく。⑤各緑地内に、最小５万坪の平坦部を包含させ、付近に所在する大水面や水流に直接。

また、有事の際に防空的役割を発揮する防空緑地の必要性も高まっていた。こうして、環状緑地帯計画の一環および防空的役割として６ヶ所の大緑地が計画された。



名称	位置	
砧	世田谷区地内	81
神代	北多摩郡神代村地内	71
小金井	同郡小金井町、武蔵野町、田無町及小平村地内	91
会人	足立地内	101
水元	葛飾区、埼玉県北葛飾郡戸ヶ崎村及八木郷村地	169
篠崎	江戸川区地内	124
計	６ヶ所	637

S=1/200,000　東京緑地計画環状緑地計画図

【地形を活かした広大な広場】

砧緑地は当初 81ha を有し、昭和 17 年度には全地域の整地を終了したが、戦中の食糧確保のために農地として利用されていた区域もあり、戦後、農地解放によって緑地面積の 40%以上を減ずることとなった。

その後、昭和 30 年代の砧ゴルフ場として利用された時代を経て、そのゴルフ場のコースの芝生や起伏の変化を活かし、開放的な芝生広場を中心とするファミリーパークとして、砧公園が誕生した。

昭和 41 年の開園当時、自由に利用できる広大な芝生広場の存在は、他に類を見ない貴重なもので、その心地よさから、近隣住民の憩いの場として人気を博し、現在も砧公園のシンボル的な役割を果たしている。

大緑地の計画当初からの基本的な考え方である、「①固有の景観を永久に維持する」、「②現在の地形をなるべく改変しない」、「③現存の樹木を保存するため立竹木もそのまま買収する」、といった点にのっとり、昭和 15 年の計画当初より現在に至るまで、基本的な緑地の地形や緑地を縦断する谷戸川の線形は変わっておらず、既存の樹木も大木となり緑陰を提供しており、谷戸川に向かい緩やかな勾配を描く芝生広場が自然地形を活かしながら快適な空間をつくり出している。

S=1/6,000　砧公園平面図

昭和の初めに計画された、東京の外周を取り巻く環状緑地計画は、最終的には、その全体的な完成は実現し得なかったかったものの、現在、周囲を高密度な市街地に囲まれた砧公園においては、都市の中に残存する貴重な緑空間として、大緑地を配置した当初の思想が、極めて大きな成果をもたらす結果となっている。

砧公園のシンボルである広大な芝生広場

【水元公園】

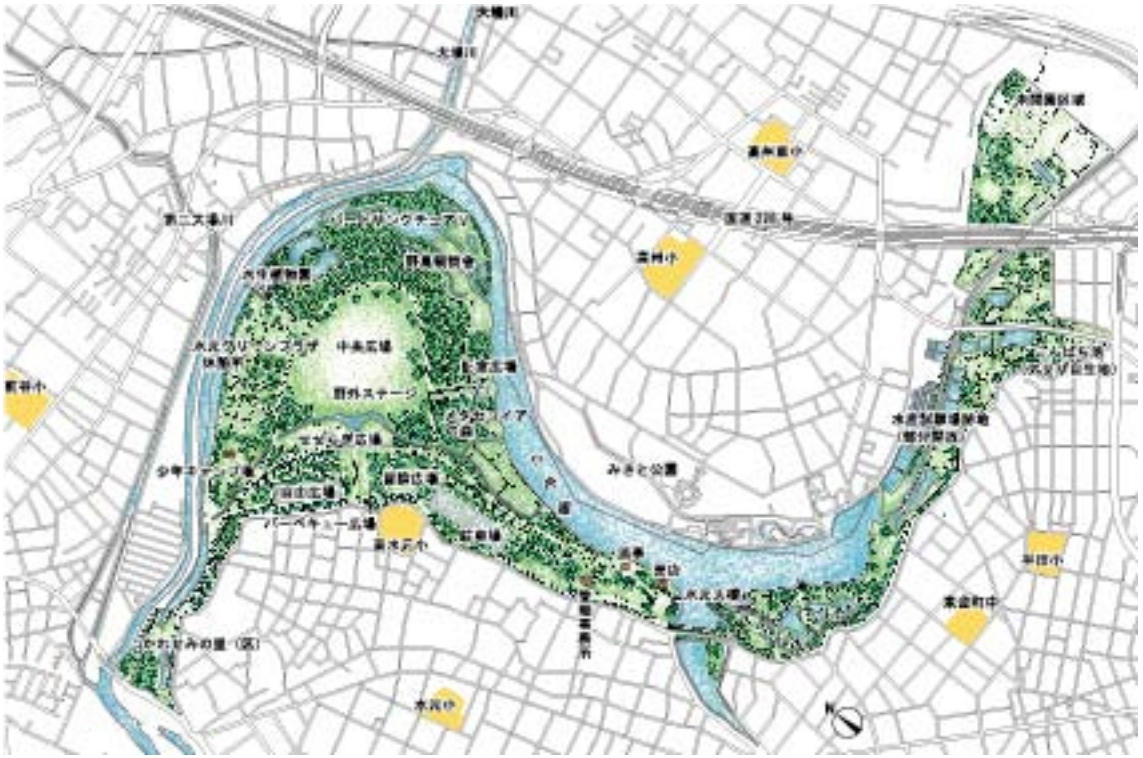
環状緑地計画における6ヶ所の大緑地の1つである水元公園は、河川の名残である小合溜という大水面を中心に整備された公園である。小合溜から引いた大小の水路を園内に巡らせることによって、他の大緑地とは趣を異にする水郷景観をつくり出している。

また、貴重な水辺の植物はもとより、高さ20mにも達する約200本のポプラ並木や約2,000本のメタセコイヤなど、都立公園としては最大の「森」を形成している。

砧公園と同様、水元公園についても、皇紀2600年記念事業として計画された当初規模の約169haに対し、40%以上が農地開放により面積縮小となったが、従来から風致地区の指定を受けるなど景勝地であったこの土地の特徴を活かした公園づくりが現在も行われている。

【諸元】

所在地：東京都葛飾区水元公園
面　積：81.7ha
開　園：昭和40年4月1日
施　設：水生植物園、バードサンクチュアリ、屋外ステージ、少年キャンプ場、せせらぎ広場、冒険広場、有料駐車場　等
管　理：東京都



S=1/20,000　水元公園平面図

秋の水元公園

水際のポプラ並木

対岸のみさと公園　水元公園の東側の対岸には「みさと公園」があり、小合溜の水面と、これら公園の緑が一体となり、良好な水郷の風景を作り出している。

アルテピアッツァ美唄（びばい）／廃校を活用して創造された芸術空間

【諸元】

所在地：北海道美唄市落合町
面　積：約 7ha
施　設：アートスペース、市民ギャラリー、野外芸術空間、カフェアルテ　等
事業主体：美唄市
設計者：安田 侃（かん）（設計監修）
管　理：NPO ｱﾙﾃﾋﾟｱｯﾂｧびばい

【概要】

美唄市はかつて、三井美唄炭鉱と三菱美唄炭鉱を擁する石炭の街として栄え、最盛期には人口９万人、本施設の元となる栄小学校の生徒数も 1,200 人を数えたが、炭鉱閉山の影響等から人口は激減、在校生も最終的には 10 数名にまで減り、昭和 56 年に同市立東栄小学校への統合により廃校に至った。

廃校後、学校敷地には２階建ての木造校舎と屋内体育館が残され、校舎１階部分は市立栄幼稚園の園舎として、屋内体育館も地域住民に解放されたが、余り活用されていなかった。

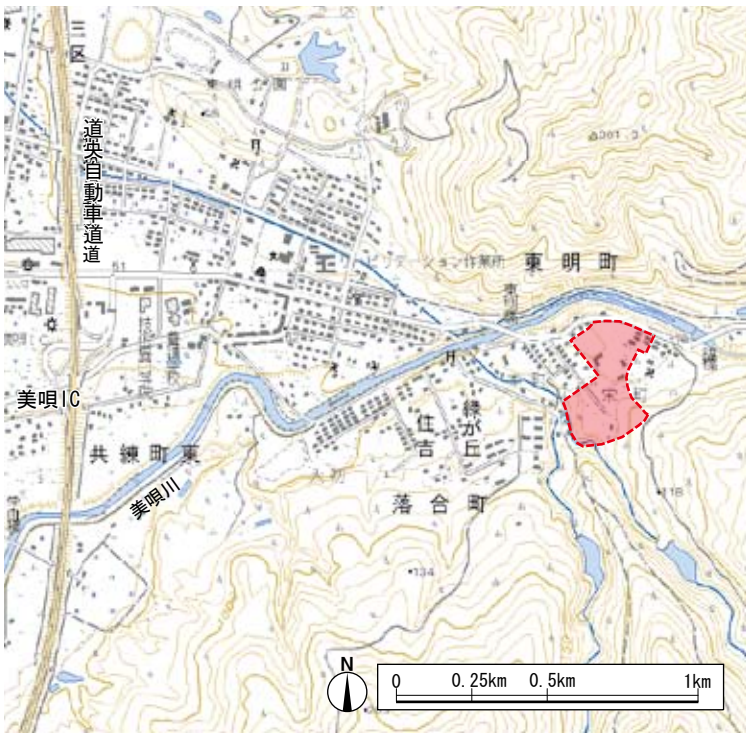
こうした中、美唄出身でイタリア在住の現代彫刻家安田侃氏は、炭鉱で賑わっていた頃を彷彿とさせる校舎と自然に囲まれた環境を気に入り、市に対し、既存施設の活用により、美唄の史実と、そこに存在した人々の精神性を象徴的に示す場所とすることを提案した。同氏は、施設の全面的な監修に協力を約束し、同氏の彫刻作品をも展示するアルテピアッツァ美唄および周辺整備が実現したのである。

時代の盛衰を見守ってきた木造校舎や体育館が、自然や地域の歴史と彫刻作品の融合した芸術空間として再生され、今では美唄市を代表する芸術・文化施設として、市民や道内外での評価も高まっている。

【沿革】

昭和 38(1963) 年　三井美唄炭鉱閉山
昭和 47(1972) 年　三菱美唄炭鉱閉山
昭和 56(1981) 年　市立東栄小学校との統合により栄小学校廃校
平成　3(1991) 年　旧栄小学校の体育館を交流スペース・ギャラリーに改修
平成　4(1992) 年　野外スペースを整備、アルテピアッツァ美唄オープン（７月）、初の演奏会を開催（11 月）
平成 10(1998) 年　旧栄小学校舎の改修工事、市民有志を中心とした「アルテピアッツァ友の会」発足
平成 11(1999) 年　旧栄小学校２階に市民ギャラリー開設

現在のアルテピアッツァ美唄（左写真）と昭和 30 年頃の美唄市立栄小学校と炭坑住宅街の様子（右写真）



S=1/25,000　位置図

【安田氏による監修】

安田氏の監修により、現地モデルを活用し、周辺との調和等に配慮した園地の造成および施設配置等が実施されている。

現在も、安田氏は定期的に現地を訪れ、園地の拡張や部分的な改修などについて監修を行い、整備を進めている。

建設当時の様子　現地でモデルを配置するなどして、安田氏監修の元、造成・施設配置等を実施している。

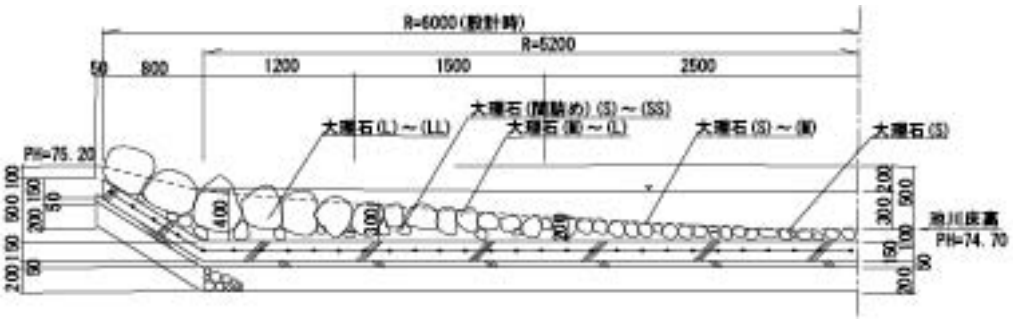
【水の広場】

現場における水路や池の規模、石舞台のモデル検討により、当初設計より、池の直径を 2m ほど拡張している（平面図参照）。

水路も当初計画では、池と開渠で結ぶこととしていたが、彫刻との配置バランスを考慮し、あえて暗渠により池とつなげるている。

水路の底面はイタリアから取り寄せた白色の大理石を使用し、モルタル目地が見えないように、小さな大理石で間詰めが施されている（下断面図参照）。

S=1/1,000　水の広場平面図



S=1/60　池断面図　現場での検討により、当初設計より池の直径を 2m(R=7000) ほどに拡張している。

水の広場

木造校舎や周辺の山並とのバランスを考慮し、池の規模を設定

【天翔（てんしょう）の丘】

当地では、他地区で発生した残土を随時搬入・ストックしており、これを活用して園内の造成等を行っている。「天翔の丘」と名付けられた築山も、この残土を活用して造成された。

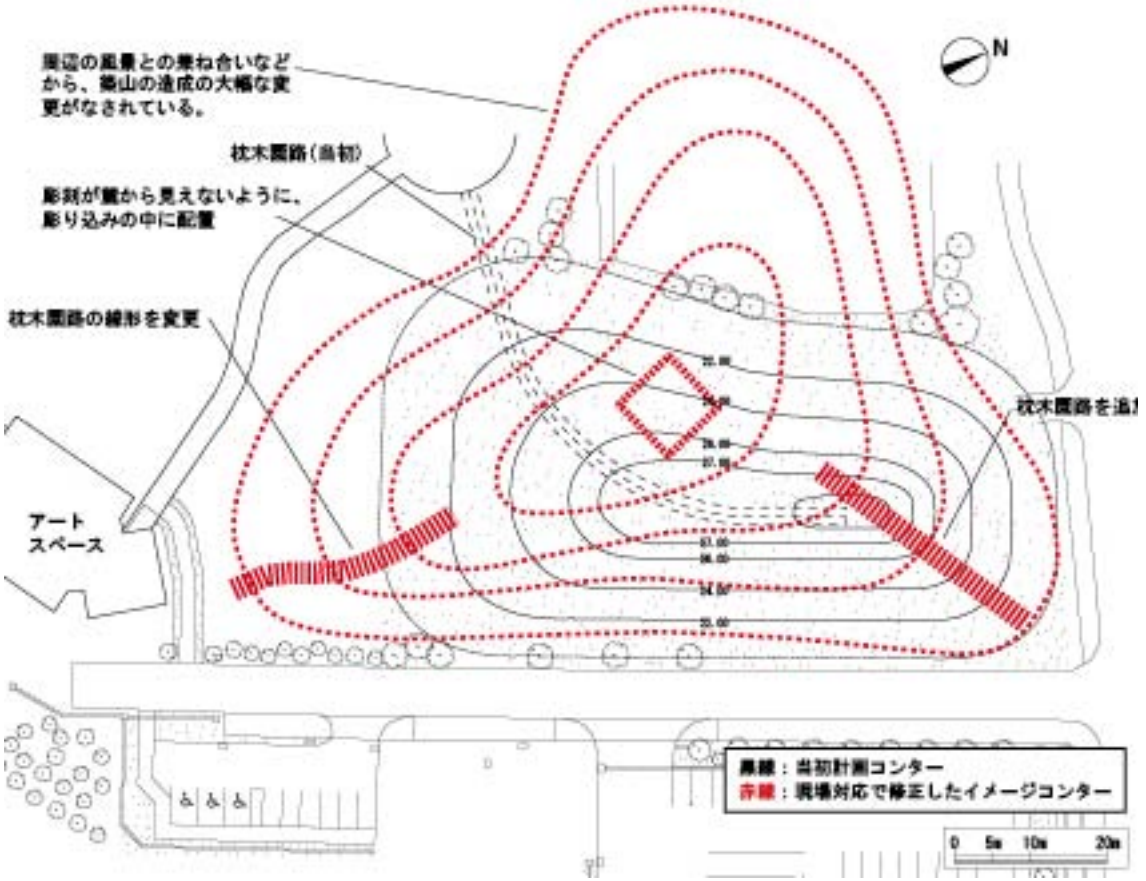
安田氏の監修により、背後の樹林や周辺の風景との兼ね合いから、大幅な造成計画の変更がなされており、特に、頂上部への彫刻設置については、当初、頂上にただ彫刻を載せるだけであったが、頂上部分を掘り下げ、そこに彫刻を隠す（丘の麓からは見えない）ように設置し、頂きに上って初めて目することができるような配慮がなされている。頂上への階段の線形も、より変化をつけるために見直しを行っている。

建設現場での安田氏

天翔の丘 頂上部

鉄道の枕木の再利用した頂上へ向かう階段

頂上部からの眺望



S=1/1,000　天翔の丘 平面図

【ギャラリー・栄幼稚園】

木造校舎教室棟は、外観や内装は当時の面影を残しつつ、設備などは改修がなされ、２階部分は「市民ギャラリー」として解放され、校庭にある屋外作品を眺めることが出来る展望展示室を２室、ほかに市民展示室２室が設けられている。１階部分は引き続き、市立栄幼稚園として使用されている。

幼稚園を含む館内の各所には、安田氏の作品で小規模なものが１４点常設展示されている。

ギャラリー

現在、２階はギャラリー、１階は栄幼稚園として活用されている旧栄小学校の校舎

【アートスペース】

体育館を部分的に改修し、鉄骨の見える天井アーチ、木製の床など当時の姿を再現しつつ「アートスペース」として活用している。

展示空間としてだけでなく、ピアノリサイタルやジャズコンサート、チェロ演奏会などの会場として、また、各種サークル活動などの場として、幅広い利用がなされている。

旧態を活かしつつ改修が施され、アートスペースとして活用されている体育館

古河（こが）総合公園／原風景の再生と新たな名所づくりを目指した市民の交流空間

【諸元】

所在地：茨城県古河市鴻巣
面　積：22.4ha（計画 25.2ha）
施　設：御所沼、民家園、管理棟、花菖蒲田、ジェラテリア、桃林 等々
事業主体：古河市
設計者：東京工業大学景観研究室（基本設計）、中村良夫（東京工業大学名誉教授、コーディネーター）
管　理：古河市公園緑地課、菅　博嗣（パークマスター）、岩堀康幸（パークマスター）

【概要】

茨城県古河市は関東平野のほぼ中央、利根川と渡良瀬川が合流する地点にある。かつては、その渡良瀬川と広大な草原を介して連なっていた沼が複雑な曲線を描いて食い込んでいた台地上、約 25ha の敷地に展開しているのが古河総合公園である。

1975 年に開園した北側の約 5ha のエリアは、江戸時代にすでに名高かったという桃の木が約 2,000 本と、新たに花菖蒲、大賀蓮（古代ハス）が植えられた沼沢からなる、典型的な花卉鑑賞用の庭である。3 月末の桃花の咲く時期には数 10 万人が訪れるという。

隣接する 20ha の敷地を一体的な公園として整備することになり、そのコーディネーターを、幼少時をこの地で過ごした中村良夫氏（東京工業大学名誉教授）が務めることとなった。

2003 年には、消滅沼の復元による自然と文化の再生、自然と人間との多様な接触を表現したデザイン、四季折々の自然に親しむ市民の営み等の点が高く評価され、ユネスコが主催する「メリナ・メルクーリ国際賞」を、アジアで初めて受賞した。

【沿革】

昭和 47（1972）年　大総合公園主要構想案の策定
昭和 50（1975）年　一部開園（5.0ha）
平成元（1989）年　基本計画の見直し委員会を開催
平成　4（1992）年　御所沼の復元（平成 8 年まで）
平成　9（1997）年　公園周辺整備計画（計画面積 25.2ha に拡大）
平成 11（1999）年　パークマスター着任
平成 15（2003）年　メリナ・メルクーリ国際賞を受賞

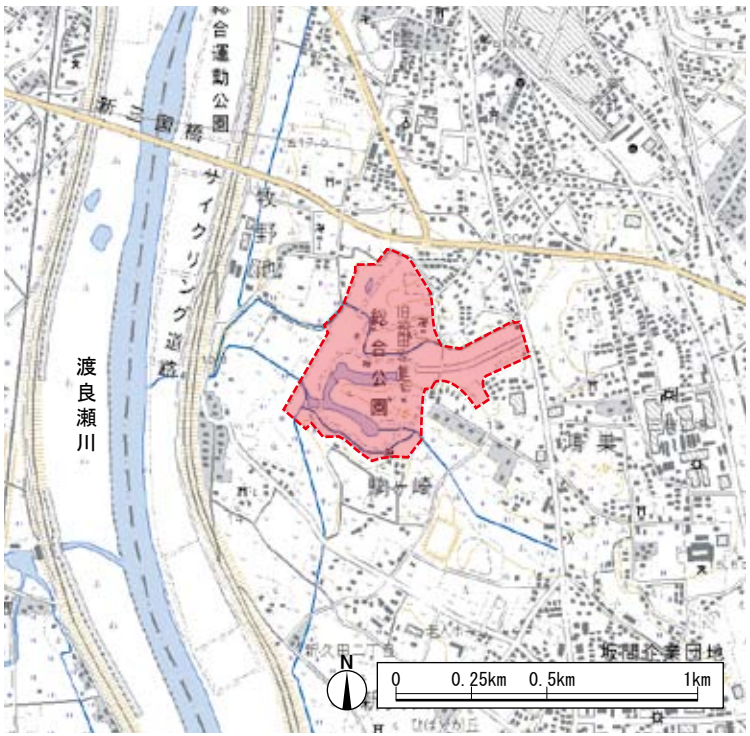
【御所沼（ごしょぬま）の来歴】

渡良瀬川沿いの舌状台地に囲まれたヒトデのような形をした沼が御所沼である（左図参照）。御所沼の名は、室町期に関東管領を司っていた足利一統が古河公方と称して移住し、その出城である「鴻ノ巣御所」を囲む沼であったため、その名が付いたといわれる。

戦前の干拓の波には取り残されていた御所沼だが、戦後の食糧難を期に始まった土地改良事業により水田へ姿を変えた。しかし、昭和 47 年には減反政策が開始され、水田が放棄されることとなった。

都市計画決定により公園区域となった後、昭和 50 年に、江戸時代に既に名高かった桃園と、ハス等が植えられた沼沢からなる約 5ha を開園した。しかし、御所沼の跡地は、市街地から流れ込む二筋の汚れた小川の処理が課題となり、手つかずのままとなっていた。

明治時代の古河の地図



S=1/25,000　位置図

【御所沼再生の過程】

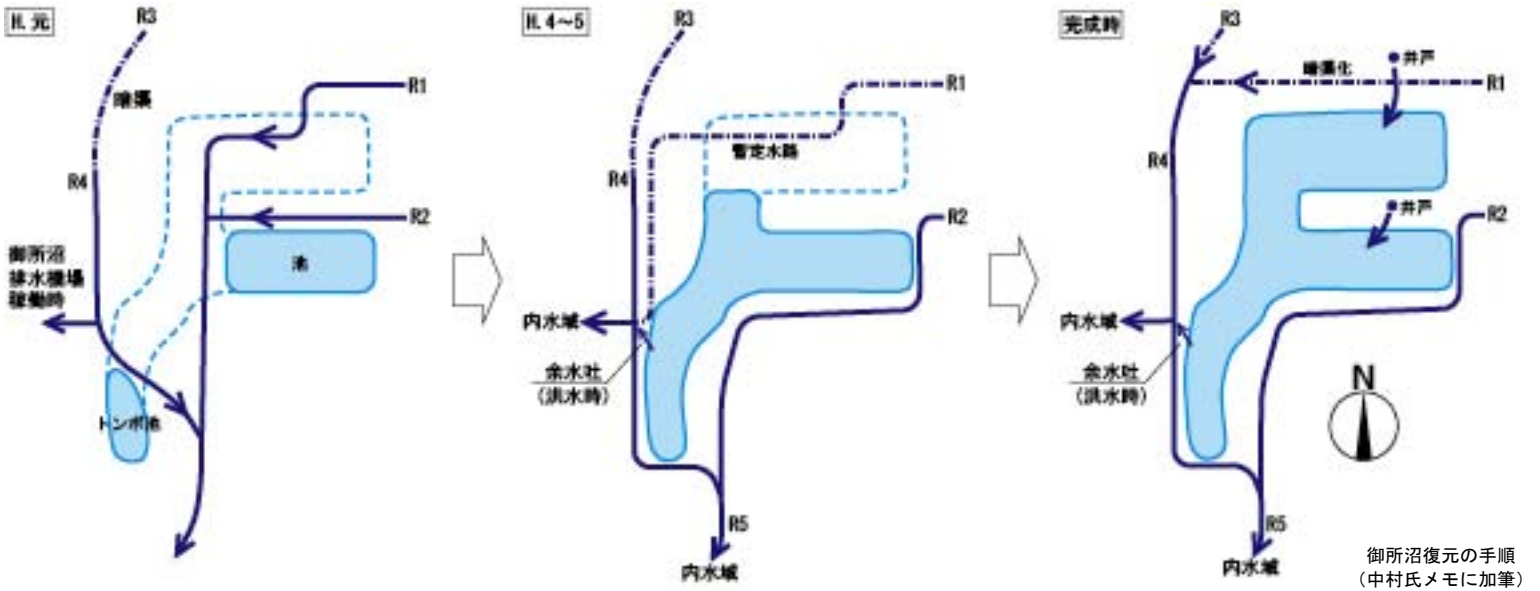
古河総合公園の整備におけるポイントは２点である。１点目は「御所沼の復元」、もう１点は、そのよみがえった御所沼を中心とした「公園づくり」である。

御所沼の復元は、平成元年の「公園基本計画見直し委員会」から始まる（座長 中村良夫氏）。「御所沼は自然と人間の愛憎が、縺れあいながら互いに育んできた記憶の集積である。そういう生成する矛盾そのものを、デザインの基底に据えるのがふさわしいのではないだろうか」との考えのもと、単に古めかしく懐かしい農村風景を再現するのではなく、水害と共に生き、国策としての水田の拡張とその荒廃に翻弄された、関東平野のすさまじい大地の輪廻転生を凝縮し造形することを目指し、谷戸地形と沼の復元が行われることとなった。

まずは南西隅のトンボ池の試掘や基礎調査が行われたが、懸案となっていた南北２筋の汚れた小川の処置が定まらず、難航した。平成４年、北側の流れは暗渠、南側の流れはそのまま小川の景色を崩さず公園の隅に迂回させることに決定し、南側の小川については、公園へ流れ込むところに沈殿池を設け、湿生植物のからんだごろた石の間を薄層流でゆっくり流して浄化することとなった。

平成８年、沼を越えて鴻ノ巣御所跡地につながる園路の橋が竣工。それと共に、南北の沼を区切っていた最後の盛土を突き崩し、撤去され、ここに御所沼がよみがえったのである。

復元前・後の御所沼周辺の様子



御所沼復元の手順
（中村氏メモに加筆）

【公園デザインのポイント】

本公園の整備におけるもう１つのポイントは、御所沼を中心とした公園づくりである。

御所沼が再生され、水際や雑木林に、懐かしい風景が再現されているが、それらは、公園周辺の現代の景観（例えばゴミ処理場の巨大な煙突など）と連続した風景として意識されている。

つまり、純粋な農村風景の再現によって風景をテーマパーク化してしまうことを避け、天神橋やジェラテリア（レストハウス）などのモダンなデザインの建造物や、土地改良事業の名残である鉄製の水門やコンクリートの水路等をあえてとりこむことにより、古めかしい風景と新しい光景が混在する、自然と人為がない交ぜとなった、現代の風景そのものが表現されている。

S=1/5,000 古河総合公園 平面図

天神橋

中村氏の手による風景のためのデッサン

【開かれた公園】

台地の縁をしめる古河総合公園は、見晴らしの良い場所である。富士塚を始め、多くの視点場が園内に設けられ、さらに視線が遠くへ届くように様々な工夫が施されている（左平面図参照）。

一方、公園の沼や森がそのまま外周の畑につながる、領域を定義されながら開かれた公園となっている。空間をその役割で純化し、細切れにするのではなく、むしろ半ば開かれ、曖昧に仕切られた森、原っぱ、耕地、田、沼という景観の綴り合わせを大事にしている。

つくば観の丘から筑波山を望む

【近世名所の基本原理の踏襲】

この公園は、近世都市名所をモデルとし、名所の基本原理をふまえ、根本となる自然地形や長い歴史の中で使い込まれてきた「地相」、その上にかかる古河公方の旧跡などの「歴史」、そしてレストランなどの「社交」の場、これらの要素の重層化することにより、公園の味わいを深めている。

ジェラテリア（レストハウス）

【場所の意味づけによるデザイン】

前述の平面図に示すように、この公園には多くの地名がつけられている。現地取材（御所沼に関する聞き取り調査）を行い、昔のこの地の小字名を収集、それを復活させたもので、言うなれば、場所の意味づけによるデザインである。

空間的なランドスケープに地名が重複することにより、空間の味わいを深くし、言葉は背景を与えられる。その呼び水として「新久田道（あらくだみち）」「星湖釣殿（せいこちょうでん）」「御手洗池（みたらいいけ）」など、一部を石に篆刻で刻み、各所に設置している。

御手洗池

新久田道

星湖釣殿

【特徴的な管理運営手法】

本公園は、特徴的な管理運営手法を導入している。パークマスター制度と古河総合公園づくり円卓会議である。

パークマスターとは、日常的な公園管理は元より、市民の活発な公園利用を促すと共に、市民の発案による企画を引き出し、これを支援する公園づくりの専門家である。円卓会議とは、このパークマスターが築いてきた人脈を元に、市民と行政の共同会議として、本公園の価値と可能性を確かめあいながら、公園の運営に関わるアイデアを収束させ、公園の活用について検討する組織である。

これらの取り組みにより、市民参加による様々なイベントや活動が展開されている。

田植えや茶摘みなど、園内の資源を活かした様々な活動を展開

モエレ沼公園／広大な敷地を活かして大胆に造形した大地のアート

【諸元】

所在地：北海道札幌市東区
面　積：約 188.8ha
施　設：モエレ山、プレイマウンテン、モエレビーチ、遊具エリア、野球場、陸上競技場、野外ステージ、ミュージックシェル等
事業主体：札幌市
設計者：イサム・ノグチ（基本設計）、ショージ・サダオ（監修）、アーキテクトファイブ（設計総括）
管　理：札幌市みどりの管理課

【概要】

モエレ沼の名はアイヌ語の「モイレ・ペツ」に由来するもので、「流れの遅い、ゆったりとした川」という意味である。旧豊平川（とよひら）の馬蹄形の河跡湖であり、札幌市では数少ない水郷景観を有し、古くから公園化が求められていた場所である。

札幌市は、このモエレ沼に囲まれた広大な土地を公園化するにあたり、20 世紀芸術の巨匠イサム・ノグチに基本設計を委ねた。ノグチは、長年温めてきたランドスケープのアイディアを込めた「公園全体を一つの彫刻」とみなし、各施設を円や三角、四角など原初的、根源的ともいえる象徴的な形にデザインし、壮大なスケールをもってこれを公園全体に配置し、世界にも類例のない公園の計画を立てた。

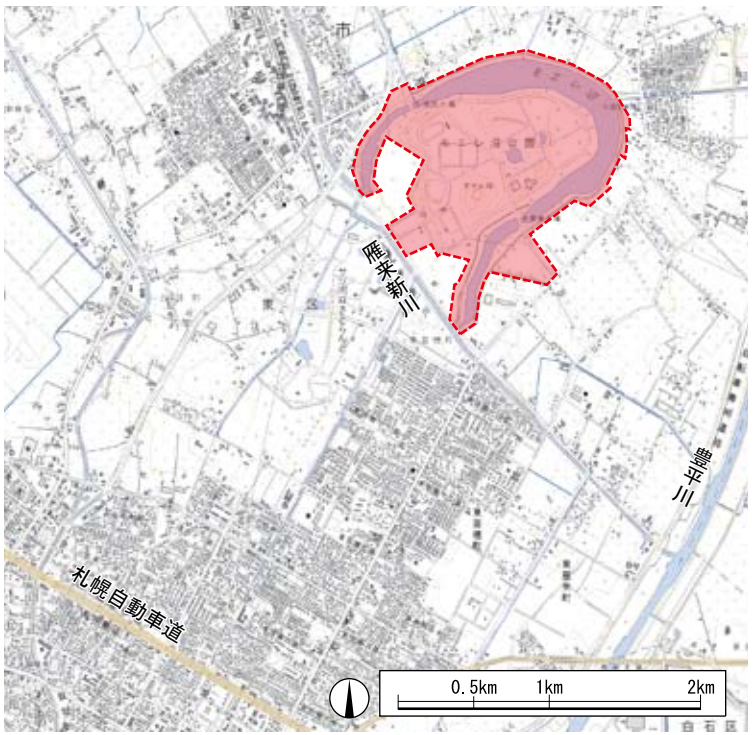
モエレ山やプレイマウンテンなどの大規模な地形造成や、ガラスのピラミッドを中心としたビスタや軸線の強調、遠方に広がる山並みを取り込むことにより、ダイナミックに変化する景観を楽しむことのできる空間となっている。

【沿革】

昭和 48(1973) 年　「札幌市緑化施策大綱」策定。都市環境公園（水郷公園）として位置づけ
昭和 52(1977) 年　公園事業に先立ち、姉妹都市ミュンヘン市の公園に習い、ごみ処理場として活用後、不燃物ごみを基盤とした公園を目指し、用地買収を開始
昭和 53(1978) 年　処理場施設の建設開始
昭和 54(1979) 年　ごみの搬入開始、平行して公園事業に着手、基本計画を策定
昭和 57(1982) 年　「札幌市緑の基本計画」においてモエレ沼公園を東北部の拠点公園として位置づけ、事業認可を受け基盤造成やサクラの植栽などを開始
昭和 63(1988) 年　札幌市内の企業家の働きかけによりイサム・ノグチに基本設計を依頼
平成元 (1989) 年　イサム・ノグチ財団の専務理事ショージ・サダオが監修、アーキテクト・ファイブが設計総括を行うことで、モエレ沼公園の造成を開始
平成 06(1994) 年　完成部分を供用開始
平成 14(2002) 年　グッドデザイン大賞 受賞
平成 16(2004) 年　全面オープン
平成 19(2007) 年　土木学会デザイン賞 受賞

ゴミ処理場当時のモエレ沼

イサムノグチの現地視察の様子



S=1/50,000　位置図

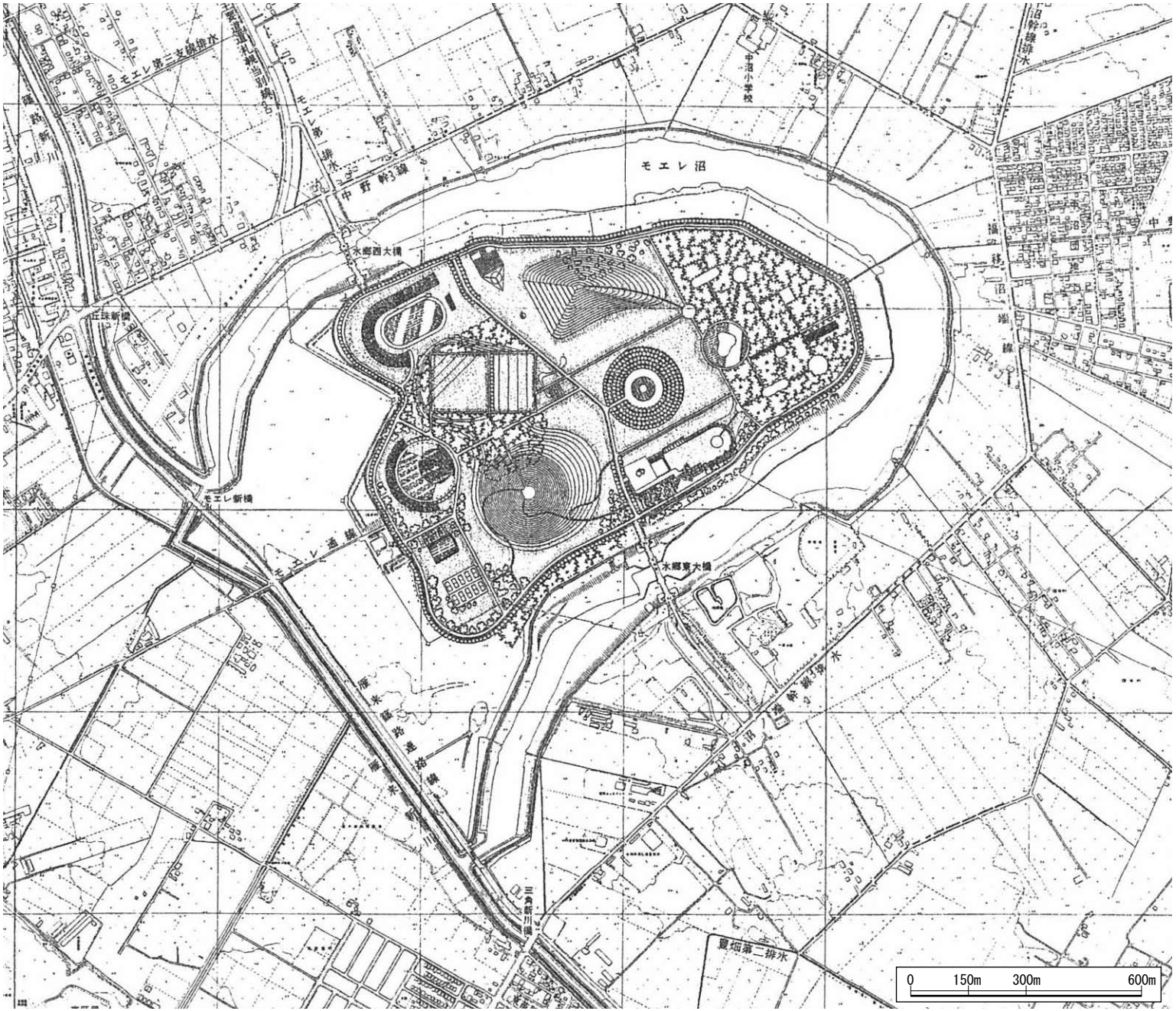
【イサム・ノグチの参加】

札幌市内の企業家が、日系米国人彫刻家イサム・ノグチに出会い、彼の未完のランドスケープのアイディアを知り、札幌市の事業に参加させるべく働きかけを行った。昭和63年3月、札幌市は、造成が始まっていたモエレ沼公園をその候補地の1つとして紹介し、その地に強い関心を示したノグチに対し、基本設計を依頼した。

ノグチは、3度札幌市を訪れ、精力的に作業を行い、同年9月には基本設計を完成させ、11月17日のノグチの誕生日には1/2,000の公園模型を披露した。

その年末にノグチが急逝し、事業の実施は危ぶまれたが、イサム・ノグチ財団の専務理事で建築家であるショージ・サダオが監修を、基本設計に参加した建築設計事務所アーキテクト・ファイブが設計総括を行うことで、イサム・ノグチの遺作となるモエレ沼公園の造成が平成元年から開始された。この事業は、当地の公園化構想から約30年の年月を掛けて実現している。

2,000分の1の公園模型



S=1/15,000　全体計画平面図

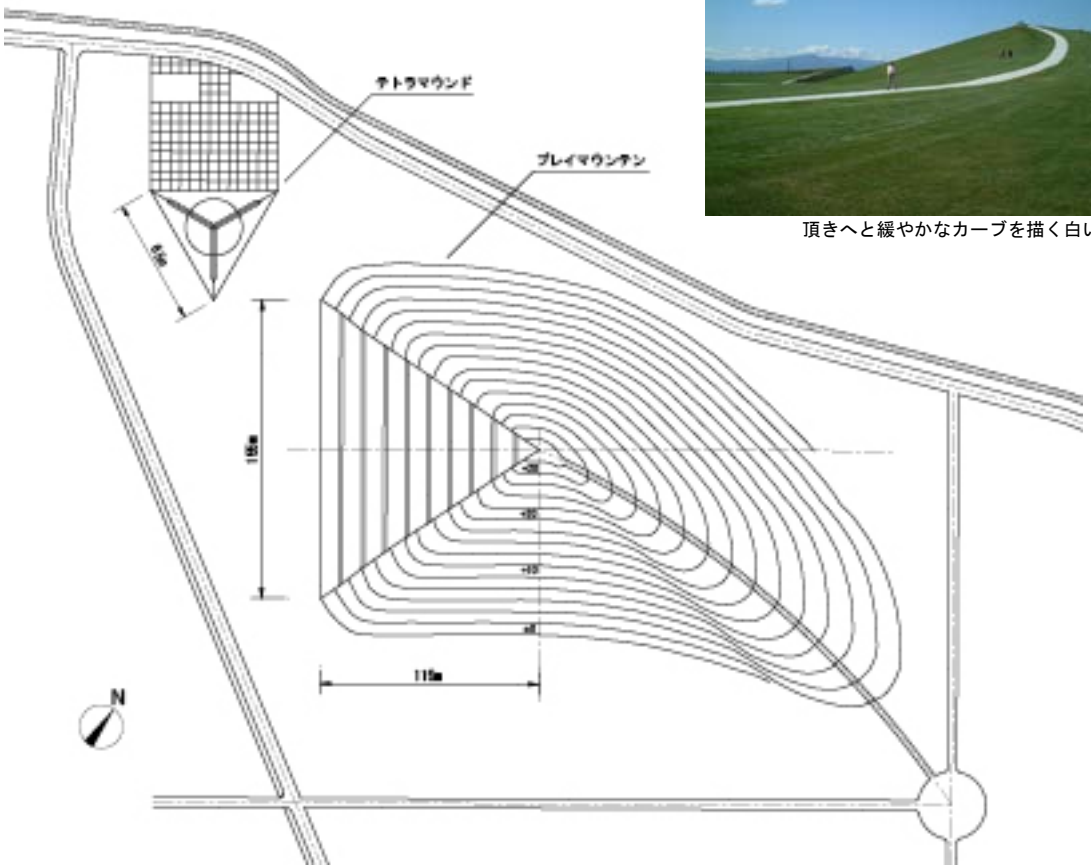
【プレイマウンテン】

1933年、イサム・ノグチは「地球を彫刻する」という発想により「遊び山」を構想し、ニューヨーク市に提案したが実現せず、長年にわたりこのアイデアをあたため続けていた。モエレ沼公園のプレイマウンテンは、この「遊び山」を実現したものであり、ノグチの「彫刻を地球そのものに刻み込む」という思いが形となったものである。

高さ30mのプレイマウンテンは、公園全体のフォルムに対して重要な役割を果たしている。この山の西側は、総重量3,000トン程の瀬戸内海の花崗岩の延段を三角形に積み上げ、ピラミッドの様に見せている。また、東側は、緩やかなカーブを描く白い園路が山頂へと続き、誰もが誘われるように頂に向かう穏やかな山となっている。

プレイマウンテン

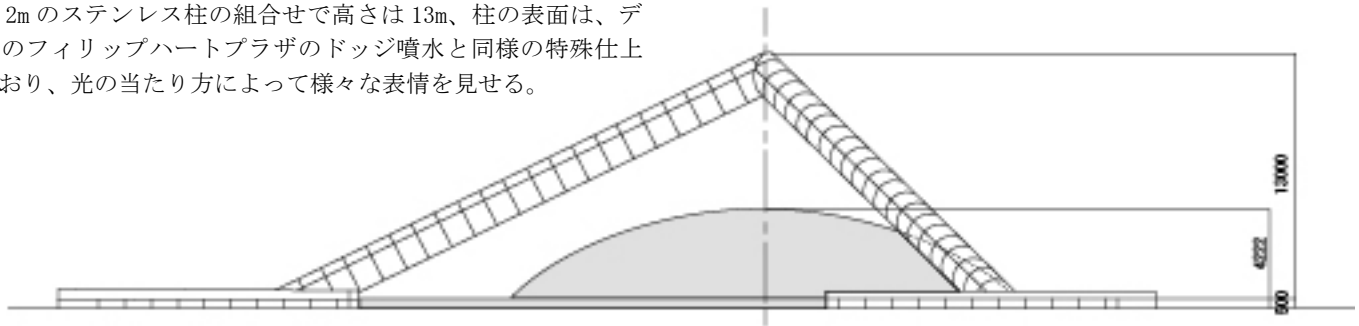
頂きへと緩やかなカーブを描く白い園路



S=1/4,000　プレイマウンテン・テトラマウンド平面図

【テトラマウンド】

モエレ沼公園で唯一彫刻的なモニュメントであるテトラマウンドは、直径2mのステンレス柱の組合せで高さは13m、柱の表面は、デトロイトのフィリップハートプラザのドッジ噴水と同様の特殊仕上げとしており、光の当たり方によって様々な表情を見せる。



S=1/400　テトラマウンド立面図

テトラマウンド

【モエレ山の造成】

札幌市からの設計条件として大きな山を造る要請があり、ノグチは基本設計において、円錐台の古墳のような山とすることでこれに応えた。

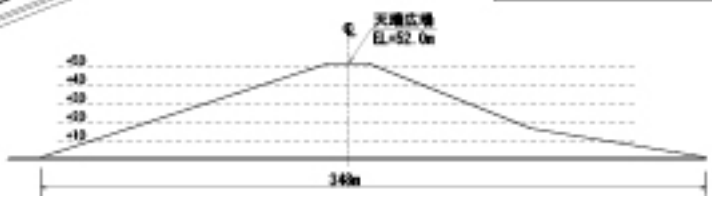
モエレ山はもともと、廃棄物処理場の跡地利用が事業の発端の１つであったため、標高 12m までごみ層を積み上げ、処理場事業の終了後は、市内の公共事業で発生する残土を何年もかけて積み上げて造られた。

造成に際しては、元々の土地が軟弱地盤で、なおかつごみ層の上に大規模な盛土を行うという今までに経験のない工事であったことから、慎重に検討が重ねられた結果、底面積 7ha、高さ 50m の見事な「山」が造成された。

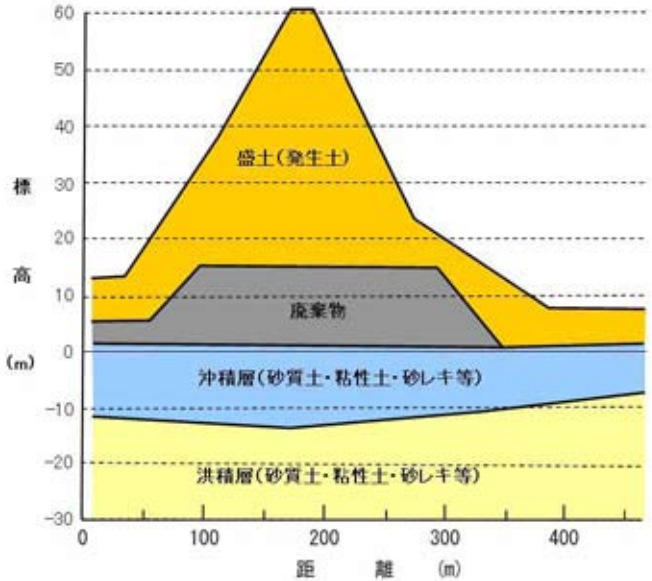
標高 62m の山頂では 360 度の展望ができ、市内の各所からのランドマークともなっている。

モエレ山

S=1/4,000　モエレ山平面図



S=1/4,000　モエレ山断面図



モエレ山の土層断面図